



Title	太宰治「女類」論：意図された〈批判〉構造
Author(s)	長原, しのぶ
Citation	太宰治スタディーズ. 2008, 2, p. 53-63
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97243
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

太宰治「女類」論

——意図された〈批判〉構造——

長 原 し の ぶ

一、「女類」の特性

豊田三郎が「太宰治氏の女性観に貴重な資料を加へたもの」⁽¹⁾と評してより、「女類」は作家笠井健一郎の次の言葉が殊更重要に受け止められてきた。

男類、女類、猿類、とかう来なくちやいけない。全然、種族がちがふのだ。

三谷憲正氏はここに「異類としての女性」⁽²⁾を指摘し、赤木孝之氏は「男類」にとつて「女類」との間の溝は、どうしようもなく深い⁽³⁾とする。諸氏による考察は太宰の女性観、太宰文学における女性の捉え方を規定し明確化する指摘として大きな意味を持つ。しかし作

品「女類」を読み解くとき、男女の絶対的距離感はずでに第一創作集『晩年』（昭一一・六、砂子屋書房）所収の「陰火」（『文芸雑誌』一一・四）にも窺うことが可能であり、〈類〉化される性差に対する着目は必ずしも「女類」の特性として有効に働くものとはいえない。全然、種族がちがふのだ」という特定部分への着目に留まらず、作品全体を捉え直すとき何が問題となるのかを考察する必要がある。それでは、考えるべき「女類」の特性はどこにあるのか。大本泉氏は、「もう一つの「男類」の自意識の物語でもあるという意味で、今後、太宰文学に表われている「他者」の問題とからめて検証していく必要」⁽⁵⁾を指摘している。更に、服部康喜氏も「女類」が「具体的な他者性の問題を秘めて」いることを前提に「女のひたむき」⁽⁶⁾さに注目する。女類と男類に区別することで対峙する対象がより一層「他者」として強く意識される現象を捉えれば、作品は描出される

男女の關係性により注目することが求められる。この検証の必要性を問ひかけながらもまだ明確な形をみない男女の關係の中には、「女類」が他作品とは異なる特性を有することが確認できるのではないか。

あらためて太宰作品全体の中に「女類」を置いてみると、その「特性」として「女類」には、男女關係がジャーナリストと人妻で設定されている点が大きく浮び上がってくる。太宰作品の男性設定の多くは、画家・詩人・文士・作家等の藝術家で占められている。少数として、その他に資産家・学生・市井の生活者等が散見されるがジャーナリストは「おさん」(「改造」昭二・一〇)、「女類」(「グッド・バイ」(「朝日新聞」昭二・三・六))と限られる。とくに、男女關係に着目すれば、「女類」と「グッド・バイ」は当事者同士ではない第三者が二人の間に積極的に関わり、物語が展開する構造を持つ点で共通性を見出すことができる。「女類」において、作家・笠井健一郎の主張が女の自殺を誘発するという事の顛末に関わっている点 は太宰作品全体からも特異な關係性として興味深い。未遂も含め心中や自殺という結果に展開する太宰作品は全部で二七作品に及ぶが当事者(男女關係)以外の存在が死の原因に結び付くのは管見の限り「女類」だけである。以上のことを確認すれば、「女類」が他に類を見ない特殊な關係性を意識した設定で成立していることは明白

であり、この特性に着目することは「女類」全体が何を意図して描き出されたのかを探る一つの端緒となろう。

もう一つの特性として、作品の冒頭に示された次の箇所が注目される。

僕(二十六歳)は、女をひとり、殺した事があるんです。実にあつけなく、殺してしまひました。

これは、作品が女の自殺から三年経過した後の地点に立つジャーナリスト伊藤の告白の書であることを示している。ここから窺える終戦直後の混乱期に体験した女の自殺が昭和二三年という現段階からは「殺した」(殺人)と改竄され、自己糾弾の視線で回想されるという構図はどのような意図のもとになされたものであろうか。刻々と推移する戦後の複雑な社会状況に飲み込まれる残された者達の意識を主眼に考察を深め、作品の全体像を捉える。

二、批判される作家像の確立

伊藤・屋台のおかみ・笠井健一郎の三人の物語は、新潮社の野平健一・ちとせ屋の房子・太宰治の三様のやりとりがその「発想のもと」となっている。野原一夫によれば、

・その頃、野平君は恋愛をしていた。相手の女性は新宿の「ちとせ」という、編集者が出入りしていた小料理屋のマダムで、人妻である。

・「お前には、俺の二の舞をさせたくないんだ。」と太宰さんは野平君に言った。「そんな女と一緒にになったら、お前は必ず苦勞する。今のお前は恋の盲目だ。盲目には何も見えないだろうが、俺には先の先まで見えているんだ。地獄だよ、あれは。」

・お前は忠告しなくちやいけなかったんだ。それをお前は、そののかしたんだろう、野平君を。⁽⁷⁾

これらの応酬が作中の笠井と柳田の会話、「僕は君をうらむ。なぜ、かうなる前に君は伊藤に忠告しなかったんだ。かへつて伊藤をそののかしたんぢやないか。」や笠井の伊藤に対する説教内容、「自分から地獄行きを志願する必要はないと思ふんだ」に反映されている。ただし、素材があったから「女類」が持つ特異な設定が生れたと單純に片付けるのは輕率であらう。何故ならば、現実と虚構化された作品には決定的な違いが示されているからだ。女の自殺という悲劇性である。

野平健一が「太宰さんは返事をしない。私（房子）が、もうおいとまします、と申し上げると、「まア、もう三十分付き合つて下さ

い。あやとりしましょう。紐あるかなア」と自身の家族と太宰の家族の交流を語っていることから、實在の房子は後に野平と円満結婚をし、妻として太宰と良好関係を築いていた。この事実を捻じ曲げる作爲的意図が太宰にはあったといえる。野平が太宰から感じと取った「女類」とおでん屋のおかみとは全く違ふという⁽⁹⁾「氣配」が示す通り、作品内の女には別の要素が加味されている節を確認できる。そこには「この富菜はねえ、おれをおどかすんだよ。おれに捨てられたら、即座に死ぬんだそうだ。青酸加里を持つてゐるんだよ。ほんとに、持つてゐるん」⁽¹⁰⁾だという太宰の言説から裏付される山崎富菜の影を見ることも可能であらう。⁽¹¹⁾女の造型には太宰を囲む周辺の様々な女性からの影響を見て取ることができる。そのように女性に対する視線を鋭敏に働かせつつ、太宰は実際には自殺する女の姿を描き出すのである。

女の自殺を作品化することで浮かび上がるものは何か。それは、女を死に追い込んだ原因を作る作家・笠井健一郎に対する痛烈な批判である。

ピシヤリと快い音がしました。トヨ公が笠井氏の頬を、やつたのでした。つづいて僕が、蹴倒しました。（中略）柳田が、コツンと笠井氏の頭を打ち、「眼をさませ。こら、動物博士。四つ這

ひのままで退却しろ。」

ここで三人から手酷い攻撃を受ける作家笠井の姿を作品は提示している。荻久保泰幸氏は笠井への批判の一要素である女性論を「男性と平等・対等」である主張と捉え、「当時の婦人解放運動の女性観、⁽¹²⁾「新しい形の個人主義」の女性観にも通うもの」と指摘する。しかし、当の笠井自身が「女をてんで信用せず」「女を嘲笑」「女に対する悪口」という女性蔑視の視点から読者層に享受されていることを考慮すれば、笠井の女性論の平等観は表層的で逆説的な女性に対する批判といえる。その在り方はむしろ新時代的平等意識が社会に未だ根付き得ない状況を露呈し、作品は脆弱な社会基盤を揶揄する立場に置かれていると見做すことが可能だ。

トヨ公は、「四十ちかひ」「横太り」「眼がわるい」「凄味のきく風態」の屋台屋の主人という情報だけが示される。野平によれば、トヨ公のモデルの「谷丹三」は「東京帝国大学の仏文科出身」⁽¹³⁾であることから小料理屋の主人でありながら知識階級にも属することが推測される。しかし、太宰はトヨ公からインテリ臭を削除することで「表情のない」⁽¹⁴⁾というどこか現実には疲弊した市井の生活者としての無骨な姿をそこに作り上げている。つまり、トヨ公から笠井に向けられた純粹な怒りは世間から浴びせられる作家への批判の反映と解

釈することもできるのである。

「お勘定は要りません。出て行つていただきます。」とトヨ公は、れいの如く何の感情も無く言ひます。「なんだ、怒つてゐやがる。男類、女類、猿類が気にさはつたかな？ だつて、本当ならば仕様が無い。」ピシヤリと快い音がした。

女の自殺に端を発する怒りがそれに留まらず、作家のこの期に及んでも繰り返す主張そのものに波及していることが窺える。これにジャーナリストという世の中に多大な影響力を持つ立場の伊藤・柳田の批判も加わる形で作家の持論は世間から完全に見放されるという図式が成立するのである。

以上のような作家批判の表出の一つには、当時の太宰の自己批判の視点を確認することも可能ではないか。別所直樹氏は戦後の太宰に関して、

当時、太宰は流行作家として、表面は颯爽とみえた。が、太宰の影は余りにも淡く弱々しい。捨てばち、やけくそ、焦燥といったものとも異なる。長い睫毛が影を落としてふるえているような危うさ、心許なさがその身邊につきまとっていた。⁽¹⁵⁾

と指摘する。この太宰が抱える「影」は例えば、鶴谷憲三氏が捉える太宰の戦後に対する「失望」⁽¹⁶⁾に一つの要因を見ることができよう。戦後という新しい局面を迎える中に漠然とした大きな期待を寄せた太宰であるが状況が変化を見せないまま己の無力を認識せざるを得なくなるのだ。

先に示した通り、太宰作品には多くの芸術家（作家含む）が登場する。芸術家がどのような結果（顛末）を迎えるのかという点に着目すれば、昭和十三年（姥捨）以後、昭和二十年（終戦）にかけては、家庭という空間に日常を置くことで精神的安穩を獲得しており、物語は家庭空間に留まり、結果として悲劇的顛末はほとんど確認されない。それと比較すれば、昭和二十年終戦以降ではその展開に日常を逸脱した悲劇が表出されていることが散見される。悲劇の一要因となる不倫の確率も戦後になって急速に作品中に増加していることも見て取れる⁽¹⁸⁾。それは、戦後という新しい局面を迎えて、社会の動きを意識せざるを得ない中、太宰が家庭という狭義な空間から社会という広義な場へ視点を拡大させていったことの証左でもあろう。「如是我聞」（昭和十三年三月「新潮」）に注目する。

家庭のエゴイズムである。それが、終局の祈りである。私は、あの者たちに、あざむかれたと思つてゐる。ゲスな云ひかたを

するけれども、妻子が可愛いだちやねえか。（中略）わびしさ。それは、貴重な心の糧だ。しかし、そのわびしさが、ただ自分の家庭とだけつながつてゐる時には、はたから見、頗るみにくいものである。

それまで希求していた「家庭の幸福」から一転、家庭に拘束されることの弊害を説いていることが窺える。関谷一郎氏は「家庭のエゴイズム」が諸悪の根源と否定されなければならないのは、「家庭」に閉じると「隣人」（他者）への眼差しを失うからである⁽¹⁹⁾と考察する。この「隣人」（他者）は、その集合体を意識するとき社会という大きな視点で立ち上がってくるものであり、新時代来襲の流れの中で否応なく外部に開示されていく太宰の姿勢が指摘できる。その社会との関わり合いにおいて見えてくる「人間の（奴隸根性）をへエゴイズム、冷たさ、うぬぼれ」をへ偽善をへ自己肯定⁽²⁰⁾が「自己を含めた人間批判」となって表面化し己の無力感に徐々に打ち萎れていくのである。従つて、笠井は太宰の自己批判と社会批判の戯画化とも言ふべき存在と位置付けられる。

笠井が繰り返す「女類と男類が理解し合うといふ事は、それは、ご無理といふものだぜ。」という主張は、元をたせば「若い頃、その愛人にかなり見つともない形でそむかれ」た打撃から成立してい

る。つまり、笠井は過去の傷に敗北したままそれを引き摺り何ら成長を見せていない。しかし、「読書界の一部では、笠井氏のそんな十年一日の如き毒舌をひどく痛快がつて」いることや編集部長の柳田が「うちの雑誌には書かねえなんて反り身になつて言ひ出しやがつたら、かなはねえ」という箇所を鑑みれば、それでも新しい時代の中で作家として世間に求められ、その地位を築いていると言えよう。最後に表される笠井の空虚な持論に対する批判は、その笠井のあり方と笠井を受容してきた世の中に対しての批判であり、そこには太宰自身の社会への眼差しと自己批判を見て取ることができる。

三、ジャーナリズムへ批判

作品は、作家・笠井健一郎の造型に見る「批判」的精神に留まっていない。さらなる「女類」の特性に着目すれば、男女関係がジャーナリストが設定された意義が重要となってくる。男女関係が「不倫」で表されることは太宰作品において珍しいことではない。しかし、男がジャーナリストであることは極めて特徴的である。

太宰がジャーナリズムに関して言及しているのは戦後になつてからである。以下、言及内容を確認する。

・ 一つの世もジャーナリストの軽薄さには呆れます。ドイツといへばドイツ、アメリカといへばアメリカ、何が何やら。(昭和二十年十一月二十三日井伏鱒二宛書簡)

・ ジャーナリズムにおだてられて民主主義踊りをする気はありません。(昭和二十年一月十五日井伏鱒二宛書簡)

・ 一、いまのジャーナリズム、大醜悪なり、新型便乗といふものなり。文化立国もへつたくれもありやしない。戦時の新聞雑誌と同じやないか。古いよ。とにかくみんな古い。(昭和二十一年一月二十五日堤重久宛書簡)⁽²⁾

以上のように、太宰のジャーナリズムに対する眼は一貫して、便乗主義的な日和見姿勢を厳しく批判するものである。この認識が「女類」にも反映されているのではないか。

作品には二人のジャーナリストが登場する。伊藤と柳田である。

伊藤は、女が自殺する原因を作り出すことから本来ならば、笠井同様に糾弾され批判されるべき人物といえる。しかし、前章で確認した通り、笠井に向けられた批判の集中のために当時の伊藤の罪は表面化せず、それどころか笠井を批判する側に位置するという不可思議な状況を生み出していく。さらに、「それ以来、僕とトヨ公は、悲しい友人になりました」という形で世間を象徴的に体現化したトヨ

公との一体化という地点にまでその存在は押し上げられるのである。そこには社会からの断罪を逃れて戦後という時の流れを強かに生き続けるジャーナリズムの姿を捉えることが可能だ。

例えば、福島鑄郎氏の調査では、戦後夥しい数の「新雑誌」⁽²²⁾が刊行され、それぞれが「明日への出発、明るい希望に満ちた日本を建設したい」⁽²³⁾などと刊行の趣意を掲げ、太宰の批判を尻目に「敗戦によって打ちひしがれた読書人」を「励ます」精神に満ち溢れていた。ジャーナリズムの言論や出版の反省なきまま進む変わらぬ「戦前体質」⁽²⁴⁾の継承を見据えた形で太宰はジャーナリズムの現実の動きも明確に捉えていたのである。その上でジャーナリスト伊藤の設定と造型があるといえよう。トヨ公との一体化は、社会と融合し巧みに世の中へ食い込んでいくジャーナリズムの厚顔無恥な逞しさを描き出しているといえる。

従って、太宰にジャーナリズムに対する明確な批判意識がある以上、伊藤自身の罪も無化されるものではない。伊藤が三年という時間経過の中、現時点で「殺人」を告白する図式を取る意図は世の中が認識しないままに投げ出したジャーナリズムの暗部を抉り出すことにあったと捉えることも可能だ。それこそが、「女類」の書き出しともう一人のジャーナリストの造型である。

あらためて作品の冒頭に注目する。

僕（二十六歳）は、女をひとり、殺した事があるんです。実にあつけなく、殺してしまいました。

過去の出来事が殺人という具体的な罪として現在の僕（伊藤）を苛んでいることがこの箇所から指摘できる。作品が僕（伊藤）の告白もしくは傷痕という形態をとった物語であることを改めて重要視すれば、そこには太宰のジャーナリズム批判の視線を捉えることができるのではないか。伊藤は笠井の主張に便乗することで女を自殺に追いやった。この〈便乗〉というあり様はまさに太宰が批判するジャーナリズム体質の体现である。そして、社会が見逃した女の自殺に対する功罪を自分自身が「殺人」と規定する伊藤の姿には己の内に罪を隠し持つ現段階のジャーナリズムへの批判が込められていると考察できる。

もう一人のジャーナリスト柳田の存在が以上の事柄を補強する。

・柳田といふ抜け目の無い、なかなかすばしい人物が、「金はある。新雑誌を発刊するつもり。君も手伝へ。」といふ意味の速達を寄こして、

・「何、ピアノ？」れいの抜け目の無い友人は、大袈裟に嘖き出し、

・「あの、失礼ですが、」と名刺片手に笠井氏に近づいた人は、れいの抜け目のない紳士、柳田でした。

・さすが、抜け目のない柳田も、頭をかひて苦笑し、

・手向ひしないと見てとり、れいの抜け目の無い紳士、柳田が、コツンと笠井氏の頭を打ち、（傍線は引用者 以下同様）

全ての登場場面で必ず「抜け目の無い」という表現が使用されていることは興味深い。伊藤を「新雑誌」編集部というジャーナリズムの世界に引き込んだのは柳田である。従って、柳田はより「ジャーナリズムにもまれた」人物として設定されている。作品が僕（伊藤）の告白であることは、柳田の生き方を狡猾で図太いと批評すること自体が、同じ世界に属する僕（伊藤）自身への批判であると指摘できよう。つまり、作品は、柳田の「抜け目」のなさが強調されればされるほどに僕（伊藤）が犯した罪も強く批判されるという構造を持つのである。

昭和三年の段階で、柳田・伊藤が属する世界は次のような状況であった。

終戦直後、二百社にすぎなかった出版社は毎月三十社ふえて現在四千社。廃業が十社ぐらいあるが不思議にまだまだふえる傾

向にある。出版業が二、三人で簡単にやれるなどという考えからだが、この新興出版も今は整理期にはいつて来た。（中略）これらの苦しい出版社をよそにうけていつているのが新興婦人雑誌と映画雑誌だ。（『新興出版社の現状』『朝日新聞』昭和三年五月二十四日）⁽²⁵⁾

このような状況の中で柳田と伊藤の文芸雑誌「新現実」は昭和三年の現在まで活動を継続させていることは注目できる。昭和二年から深刻に取り上げられる出版界の用紙入手難である「五月危機」⁽²⁶⁾をも乗り越え、巧みに活動を続ける姿がジャーナリズムを取り巻く社会状況と対照化されることで強く照射されていく。あえてジャーナリストを設定した太宰の意図もこのようにと求めることができる。

四、重層化される〈批判〉——女の役割

「女類」は、作家に自己投影された自己批判とジャーナリズムに対する批判と社会批判がそれぞれの人物に形象化される形で成立した作品と捉えることができる。その批判が一つに収斂するのは一重に女の死という嚴肅な事実によるものといえる。服部康喜氏はおかみに注目し、「女性の憐れさ」「女のひたむきさ」⁽²⁷⁾を軸に作品を評価し

た。男の言葉に翻弄され自殺する女の造型考察としては指摘通りであろうが、作品は果たして女の死を美化することにその目的を置いているのか。ここでは享受される自殺の事実が三人の男によって自己批判・社会批判・ジャーナリズム批判を生み出す役割と捉えることで女の死を考察する。

a 女類は、金が好きだからなあ。(中略) 女類の額には例外無く、金の『カ』の字が書いた三角の紙が、びつたりはられてゐるんだよ。

a いまに、死ぬのは、お前のはうだらう。

b 死ぬといふんです。わかれたら生きてをれないと言ふんです。

b 生まれてはじめての恋だと言ふんです。

a が表すのは女に付随する「金」という生々しい現実の要素である。対して作中のおかみに強調されるのはbで表された、感傷的なロマンスの要素である。女の自殺によってロマンスが成立するために、作品は、笠井の存在が批判される構造を作り出している。笠井による女性蔑視を増長させる社会の在り方をも包含する形でその批判は描き出されている。笠井の「女類。男類。猿類」という主張が女の死後までトヨ公の屋台で繰り返されることは女の死を持ってしても

変化を見ない社会を批判的に逆照射する一面といえる。それは、笠井が最後にトヨ公の店を訪れた理由が「香典千円」を渡すためであった展開から笠井の悔恨と虚しい反省を辛うじて示すことで批判の対象を明確にする意図を汲み取ることができよう。

一方で、舞台となる屋台のおでん屋は、「市場に物資がたくさん出てゐて、また飲み食ひする屋台、小料理屋が、街々にひしめき、あふれるといふ感じで立ち並び、怪しい活況を呈してゐた事でした。」という戦後の配給制度を掻い潜ったヤミ市場を中心とする混乱期を体現するものである。昭和二年五月には「ヤミ料理を追放」の動きが活発となり、昭和二年七月には「料飲店の休業」が全国一斉に開始される運びとなる。女の死後三年という年月の経過はトヨ公を含む市井の生活者達をも巻き込む形で急速に変化しているといえる。女の死によって伊藤とトヨ公は「悲しい友」という紐帯で結ばれることを考慮すれば、トヨ公達が直面する厳しい現実状況を理解した上で伊藤の現在があると指摘できよう。昭和二三年の地点から女の自殺を「殺人」と捉え直す伊藤の意識には、ロマンスに浸り、現実から乖離していった女の姿を自身の内部に再規定し直す積極的意志が垣間見られるのではないか。恋に殉ずる女の死はただ純粹に他者に向かって行く高潔な精神である。しかし、それを女の感傷的感情である「自殺」という側面に閉じ込めることなく、自分が手を

下すことで社会との乖離が成立していると認識することはトヨ公をはじめとする世の中の市井の人々に対するジャーナリストとしての責任放棄を自己批判していく姿と指摘できる。女の死が現在の社会状況と相容れないロマンスであることが強調されればされるほど実生活から切り離されたその死を通して昭和三年という地点に置かれたジャーナリスト伊藤の懊悩が立ち現れる構図といえる。

「殺人」をあらためて告白するという体裁は、女の死を自分の責任と受け止め、批判されるべき自身の現実のあり方、ジャーナリストとしての姿を批判のままに対峙していく一つの覚悟を示している。

柳田と笠井とトヨ公の姿を女の死という一点から回想すること、それぞれに付与された批判や社会状況を自己内部に取り込んだ形で伊藤の現在があるのである。

以上の考察から女の死を軸として「女類」は「批判」という地平の中に意図的に置かれた作品と捉えることができる。そして、設定の特性を考慮すれば、他作品との比較からそれぞれの人物が荷わされた役割が明確であるという点に置いて「女類」には大きな特質があるといえる。描出された「批判」の眼差しがどこへ帰結するのかは類似する設定を持つ「グッド・バイ」に委ねられるべき問題であったかもしれない。しかし、「グッド・バイ」が未完に終わること「女類」から継承されるべき「批判」の行方は立ち消えることにな

る。その意味でも「女類」を太宰作品における重要な位置にある作品として取り上げることが大きな意味があるだろう。

注(1) 豊田三郎「創作月報」〔文芸時代〕一九四八・五↓「解題」〔太宰治全集10〕一九九・一、筑摩書房

(2) 三谷憲正「太宰文学の女性像——禁忌の観念を中心として」〔太宰文学の研究〕一九九七・五、東京堂出版

(3) 赤木孝之氏は、「この作品は、太宰の『女性観』を描いたというよりも、むしろ、どうにもならない男と女の乖離を物語ろう」としたと述べ、「女性観」を前提にしていない。しかし、男女の距離感

は太宰が捉えていた女性に対する一見方々を表している。従って、氏の指摘も広義において豊田三郎の流れとなる。「女類」〔太宰治大辞典〕二〇〇五・一、勉誠社

(4) 例えば山内祥史氏は「陰火」について、「男女は食い違い、両者の間には無限の距離感があり、その性はなにか暗い罪の影をひきずっている」と埋まらぬ性差の問題を指摘。「陰火」〔太宰治必携〕一九八一・三、学燈社

(5) 大本泉「女類」〔太宰治全作品研究事典〕一九九七・一一、勉誠社

(6) 服部康喜「女類」〔東郷克美編「別冊国文学太宰治事典」一九九五・五、学燈社〕

(7) 野原一夫「俺を捨てるか、女を捨てるか」〔回想太宰治〕一九七五・五、新潮社

(8) 野平健一「モデルの真贋」〔太宰治研究3〕一九九六・七、和泉書院

(9) 野原健一〔前掲載注①〕

(10) 堤重久「再会と訣別」〔太宰治との七年間〕一九六九・三、筑摩書房

(11) 他にも野平健一が「私は、いま有名な女を、妙な女だと思ひ、「女類」(八雲、創刊号)といふ、小説を、ちらと思ひ浮べて、笑ひがこ

みあげてきた」と「女類」のおかみを山崎富栄と結び付けている。

(12) 「如是我聞と太宰治」△新潮「第四五巻第六号一九四八・六」

荻久保泰幸「晩年の女性観」△「解釈と鑑賞」二〇〇七・一一、至文堂

(13) 野平健一（禅掲載注⑪）

(14) トヨ公の描写には作中の「東京の情景、見るもの聞くもの、すべて悲しみの種」という戦後直後の世の中が反映していると指摘できる。

(15) 別所直樹「戦中・戦後の風俗と太宰文学」△「解釈と鑑賞」一九六九・五、至文堂

(16) 鶴谷憲三氏は、「敗戦後の現実を当初希望として捉え、「新しい形の個人主義」を夢想した太宰が現実の世界で見たものはいっにつに変わらぬ旧態依然としたエゴイズムの横行であり、浮わついた観念論議であり、似而思想家・文化人の姿であった。」と述べ、変革の適わぬ己の無力感に苛まれる太宰を指摘。「太宰治とウアレリー」△「解釈と鑑賞」一九八三・六、至文堂

(17) この時期は「姥捨」作品化を契機に過去と訣別し、昭和十三年九月に見合した石原美知子との結婚が太宰に新しい「家庭」を与えたことが大きく影響している。

(18) 「男女関係」を示す描写は「夫婦関係」が大部分（半数以上）であるが、家庭を持つ中で男女の関係を描く「不倫」も多く確認（約4分の一程度）できる。「夫婦」「不倫」以外の関係として「恋愛」「片思い」「近親相姦」が確認できるが小数に留まる。

(19) 関谷一郎「如是我聞」――開かれてあることの△恍惚と不安▽「△「解釈と鑑賞」一九九九・九、至文堂

(20) 渡部芳紀氏は、太宰の戦後の在り方を「人間失格」に象徴される「自己批判」と捉える。「晩年・戦後文壇の旗手」△「解釈と鑑賞」一九七二・一二、至文堂↓「太宰治心の王者」一九八四・五、洋々社

(21) 『太宰治全集12』（一九九九・四、筑摩書房）

(22) 昭和二十年に玄同社が刊行した「明日への叢書」の一文。（福島鐸郎「戦後雑誌の周辺」一九八七・一二、筑摩書房）

(23) 福島鐸郎「戦後雑誌の周辺」△「九八七・一二、筑摩書房」

(24) 松浦総三氏は「日本の出版界における戦争責任の追及の運動は終わった。これは戦後にほんの一月ばかり言論・出版界に登場した閃光にすぎなかった。この辺に、戦後の日本の言論出版の基本的な体質があるのだらう。そして、言論・出版は戦前の体質をそのまま継承してゆくことになった。」と指摘。（戦後ジャーナリズム史論――出版の体験と研究一九七五・五、出版ニュース社）

(25) 「朝日新聞」△一九四八・五・二四

(26) 「朝日新聞」△一九四七・四・七

(27) 服部康喜「女類」△別冊国文学太宰治事典一九九五・五、勉誠社

(28) 「朝日新聞」△一九四七・五・一七

(29) 「朝日新聞」△一九四七・七・二二

(30) 女と伊藤の恋は女が注目した伊藤の「指先の美しさ」「ピアノ」等の現実生活から遊離したところから始まっていることを考慮すれば女のロマンチズム的要素が強いことを指摘できる。